

論文の和文要旨	
論文題目	現代中国と日本における生涯学習の現状・課題 ー中日モデルの比較分析から見る大学の新たな役割
氏名	頼 瑜瑩（らい ゆえい）
本研究では、生涯学習について初めから何かの理論を設定して検証するのではなく、まずは先行研究の考察を通じて、生涯学習の理論から現代社会の生涯学習推進政策について課題を導き、その上で日中の事例研究から生涯学習の実践過程における個人・社会・国家への影響諸形態について見ていく。具体的には、日中の大学で実施されている生涯学習プログラムに注目し、その内容や実施形態、さらに直面している課題に関する共通点や相違点を明らかにすることを目指す。この研究を通じて、生涯学習の意義や課題についての理解を深め、大学の生涯学習の役割を明らかにし、生涯学習システムの形成に資する知見を提供することを期待している。 上記の目的を明らかにするために、本論では以下の研究設問に基づいて分析を試みる。 第一に、中国と日本における国家政策において「生涯学習」はどのように定義され、また変遷してきたのか。特に、中国における生涯学習の普及状況は学習者の利益やニーズにどのような影響を与えているのか。その背景にはどのような地域的・社会的要因が存在しているのかを探究する。 第二に、日中両国の生涯学習の特徴を明らかにしたうえで、中国では大学の生涯学習プログラムと人材育成政策が理論的な生涯学習の定義から乖離しているのかを検証する。また、両国において大学の生涯学習プログラムは、人材育成政策とどのように関連しているのかについて考察する。 第三に、教育政策が効率性を追求するのではなく、教育機会の提供と平等を重視することが、学習者の満足度を向上させる結果につながると考えられる。そのため、大学の生涯学習プログラムが公共施設や民間教育機関では満たされない学習者のニーズをどのように補完し、生涯学習システムのバランスを維持しているかを検証する。 最後に、日本と中国の大学における生涯学習の制度が、時代の要請に応じて職業教育、成人教育、学歴教育の役割を果たし、どのように人々の能力の維持・向上に資する機能を果たしているのかを考察する。 本論の構成は、第1章～第3章によって構成された理論研究と政策研究の部分である。実践調査と比較分析の部分は第4章～第6となっている。最後に終章によって本論の結論と限界を示す。 序章では、本研究の背景と問題意識を明確にすることを目的としている。まず、生涯教育の萌芽と生涯学習の展開を概観し、次に本論の分析視角を紹介する。具体的には、コルブの学習スタイルの3段階	

理論やクラントンの成人教育における 3 つのニーズ、さらには政策介入の論理やフィッシュキンのトリレンマ理論を取り上げる。また、日本と中国を比較の対象とする理由についても考察する。さらに、本論の目的、研究方法と対象、分析方法を概述し、最終的に論文の構成を示すことで、研究の全体像を明らかにする。

第 1 章では、生涯学習の定義と目的について先行研究を考察する。生涯学習の本質からどのような定義を定められてきたか、生涯学習の形式と社会において構成された生涯学習システムの在り方を分析する。複数の学者の生涯学習に関する成人教育理論や社会構造理論などを辿った。最終に、生涯学習の定義と範囲を整理し、先行文献に提示した定義によって現代の生涯学習の在り方と問題点を提示する。

第 2 章では、中国の生涯学習の概要と変遷を整理し、国家レベルの政策について国家背景を踏まえながら研究していく。また、中国の職業教育が生涯学習として認められているのかを探る。次に、「生涯教育」と「生涯学習」との関係を明らかにしていく。特に、教育の市場化が生涯学習に与える影響や、福州市における事例を通じて、オンライン教育の発展とその特徴を検討する。最終に、教育改革に基づき、生涯学習の発展傾向を教育全体像から読みとっていく。

第 3 章では、日本の生涯学習を概観し、特に職業教育や学歴教育の現状に焦点を当てる。日中の生涯学習の異同について、理論、社会教育、職業教育の位置づけを比較し、最終的に比較分析から得られる示唆をまとめる。日本と中国の研究者による定義した生涯学習の用語を確認したうえで、日中における生涯学習に関する定義・発展と変遷を文献研究によって概説していく。最後に日本における生涯学習の概要と発展特徴について明らかにしたあと、象徴となった社会教育について日中両国の特徴を比較しながら考察していく。

第 4 章では、北京語言大学と福建師範大学を中心に、中国の大学における生涯学習施設を分析する。校外学習センターへの訪問調査を通じ、両校の比較分析を行い、最終的に中国の大学における生涯学習の特徴を明らかにする。中国の大学における生涯学習プログラムを中心にし、実践の面から第 3 章に提示をした特徴に補充をする。中国の二つの大学の生涯学習施設の運営実態を調査することによって、その特徴を明らかにする。また、中国における二つの大学の生涯学習施設の運営実態を比較することで、「産学連携」「インターネット技術」に焦点を当て、中国の生涯学習において大学の役割と意義を明らかにする。

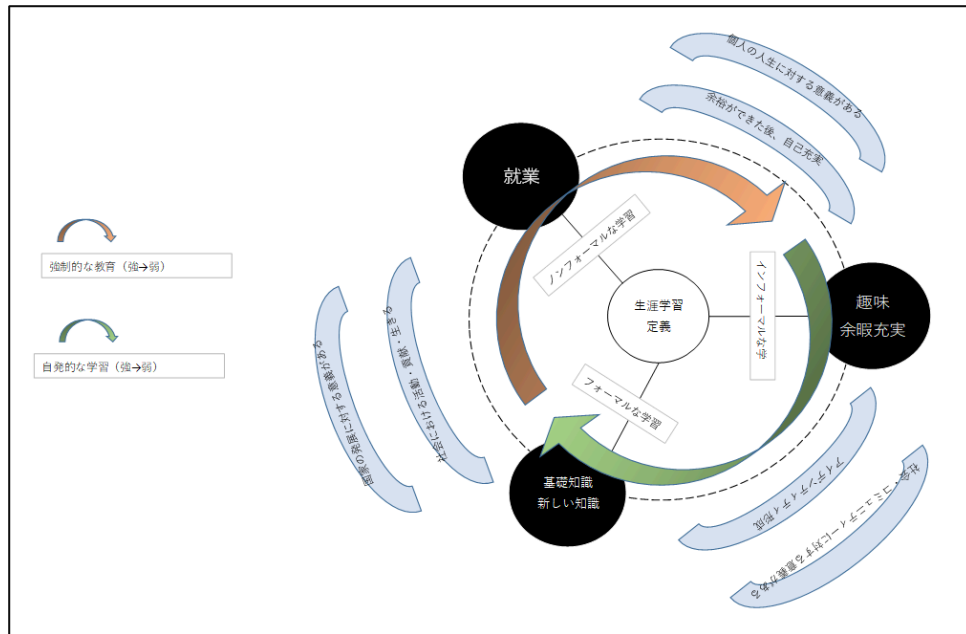
第 5 章では、フィールドワークおよびインタビュー調査を通じて、日本の生涯学習施設の現状を探る。分析結果を基に、学習環境や提供されるプログラムの特徴を比較検討し、具体的な改善点を提示する。日本の研究対象校の実態を分析し、フィールドワークと観察研究の結果とアンケート調査の分析を

踏まえ、両校の比較研究を行う。最後に質的研究法に基づき、SCAT 分析法を用い、インタビュー調査を分析する。日本の大学にある生涯学習施設と実施している生涯学習プログラムについて分析をすることによって、日本の大学の生涯学習の役割を明らかにする。

第 6 章では、生涯学習における選択肢と大学の役割を探る。教育の機会均等の観点から、政策の介入理論やマクロ的視点から大学の生涯学習の役割について考察し、最終的なまとめを行う。第 4 章と第 5 章において分析をした結果を用い、日中の大学の生涯学習施設と比較をすることにより、日中の大学の生涯学習の特徴を明らかにする。また、日中の生涯学習の特徴を踏まえ、インタビュー調査に基づき、生涯学習の選択モデルを提示する。日中における生涯学習の比較分析に基づき、生涯学習における共通問題である職業教育の位置づけから生涯学習システムにおける大学の役割まで辿った。

終章では、序章に設定をした課題を確認していく。以上の章を踏まえ、結論に辿った。さらに、インタビュー調査と質的分析によって運営スタッフの経歴から学習者が望ましい生涯学習の在り方の示唆も得られた。また、結論では明らかにしたこととできなかったことを説明する。最後に本研究においてできなかったことやその原因を内省し、生涯学習が抱える課題とそれに対する部分的な提言、及び本研究の限界と課題について述べる。

本研究は、中国と日本における生涯学習の理論的枠組みと国家政策への適用プロセスに焦点を当て、両国の文教政策において「生涯学習」の概念が如何に定義され、変遷してきたかを比較検討することを目的とする。具体的には、日中両国の大学が実施する生涯学習プログラムに着目し、その内容・実施形態・課題に関する共通点と相違点を明らかにする。研究手法としては、先行研究および理論研究の知見を踏まえ、コルブ (Kolb) の学習スタイル三段階理論およびクラントン (Cranton) の成人教育における三つのニーズ理論を援用し、日中両国の生涯学習理論を統合的に以下の図のように整理した。



理論的共通性の中でも、政策への適用は各国の地域的・社会的文脈によって差異が認められる。欧米の理論では学習者の自律性を尊重し、個人のキャリア開発や社会参加を生涯学習の主軸と位置づける一方、職業教育の導入時期を義務教育段階に前倒しする傾向が顕著である。これに対し、日本の生涯教育は地域コミュニティの形成や個人の学び直しの場として機能しつつも、学習目的に応じて年齢層が固定化される傾向が指摘される。一方、中国の生涯学習は国家戦略の影響を強く受け、理系人材育成や特定産業の発展が政策の優先課題として強調され、個人の自律的学びとは一定の距離を置いている。換言すれば、中国における生涯学習の推進は、国家の経済成長や技術革新と密接に連動している（第2章・第6章における政策分析および大学プログラムの比較検討を参照）。

加えて、日中両国の大学が運営する生涯学習プログラムに焦点を当てたフィールドワークを実施し、実践レベルでの運営実態を明らかにした。政策介入の論理（予防・補償・活性化・エンパワーメント）およびフィッシュキン（Fishkin）のトリレンマ理論を分析枠組みとして用い、大学の生涯学習が教育体系内で果たす役割を考察した。以上の分析により、中国の国家主導型モデルと日本の地域密着型モデルとそれぞれに大学の生涯学習の位置づけを具象化した。さらに、インタビュー調査と質的分析を通じて、大学の生涯学習プログラムの運営スタッフの経歴や学習者のニーズから、理想的な生涯学習の在り方に関する示唆を得た。

今後の課題は、学習者へのインタビューを通じて、実際に生涯学習施設がどのような効果を発揮しているのかを検討していきたい。特に、転職が増えている日本では、職業教育の影響がスキルアップにどの程度寄与しているのかを探ることである。